

与格と前置詞句

—動詞 anpassen, angleichen の場合—

時田 伊津子

1. 導入

ドイツ語の他動詞構文には与格目的語も前置詞句も実現する場合がある。

(1) a. Anna schickte dem Verleger die Photos.

b. Anna schickte die Photos an den Verleger / in die Bibliothek / auf den Speicher. (Wunderlich 2006: 35)

上記のような例の場合、典型的には人間（生物）を表す名詞句は与格に実現し、与格は所有変化に直接関与する対象、前置詞句は移動の方向を表すと言われている (Wegener 1985: 226ff., Wunderlich 2006: 35 等)。このタイプには動詞 schicken や senden などが該当する。また、二重目的語構文の geben や schenken は主に所有の変化を表し、所有者の与格と共起するが、場所を表す前置詞句とは共起しないと述べる研究がある (Adler 2011: 14 等)。

(2) a. Oli gab Peter das Buch.

b. *Oli gab das Buch an Peter.

c. *Oli gab das Buch zu Peter. (Adler 2011: 14)

しかし、例えば動詞 geben についてはコーパス調査で前置詞句の事例も収集されている (De Vaere et al. 2018: 8f.)。この schicken のタイプと geben のタイプは与格を伴う際に与格>対格の語順が無標である点で共通している。

一方、二重目的語構文で対格>与格の語順が無標となる動詞もある。例えば動詞 aussetzen, angleichen などが該当する。これらの動詞と共起する与格は受容者ではなく場所的であり、先行研究では統語的特徴において前置詞句との類似が指摘され、また英語の対応表現が二重目的語構

文ではなく前置詞構文であると述べられている。(Meinunger 2006: 93ff., McIntyre 2006: 207)。しかし共起する与格と前置詞句の交替については一様ではなく、anpassen, angleichen のように可能な動詞もあれば、aussetzen, unterziehen のように不可能な動詞もある(時田 2019: 201ff.)。

(3) a. Sie passen die Angebote den Bedürfnissen an.

b. Sie passen die Angebote an die Bedürfnisse an.

(4) a. Thomas setzte das Kind der Gefahr aus.

b. *Thomas setzte das Kind in die Gefahr aus.

本稿ではこのうち anpassen, angleichen の文を対象とし、与格あるいは前置詞句が選択される動機を探ることを目指し、与格の構文と前置詞句の構文がどのような点でどの程度類似し、どの程度差異を示すのか、コーパス調査を元に明らかにすることを目的とする。形式が異なれば意味も異なると言われるが、この2つの項にも当てはまるのであろうか。

2. 先行研究

この節では、与格と前置詞句の交替について先行研究での記述を確認する。この交替については多くの文献で言及されている。Matzel (1976: 155ff.) は数多くの動詞を文型や意味、前置詞の種類を基準に分類している。その結果に基づき、与格と前置詞句の交替が可能な範囲は限定されており、与格全般に適用されるのではないことや、交替は必ずしも与格の多義性を前置詞句で限定する「意味の明示化」ではないことを指摘している(Matzel 1976: 170ff., 175ff.)。

Wegener (1985: 216ff.) も与格構文と前置詞句の構文には差異があり、統語的には語順や対格目的語実現の必要性、複数項の実現において異なるふるまいを見せると記述している。また動詞の名詞化の際の実現や任意性、bekommen 受動化における差異も指摘した。意味的には、有生性の制限や意味役割で違いがあり、直接関与の度合いや動詞相でも異なる特徴を示すという。前置詞句は具体的、場所的であるのに対し、与格構文は抽象的で関与者を示すとしている。また生物は与格、無生物は前置詞句というように相補的な分布をする動詞もある一方、与格は生物に制限され、前置詞句は制限がない動詞もあると述べている。

近年は英語の与格交替 (dative alternation) 等との対照という視点からの

考察もみられる。Wunderlich (2006: 33ff.) は、二重目的語を取る主な動詞として受容者を伴う所有変化動詞と、場所を伴う場所変化動詞について述べ、両方の性質を持つドイツ語の *schicken* のような動詞の元では人間（生物）は受容者構文 (recipient construction) に与格として、無生物は着点構文 (goal construction) に前置詞句として現れる傾向があるとしている。

De Vaere et al. (2018: 2ff.) は、前置詞句と共起しないと言われる動詞 *geben* が実際には与格だけでなく、頻度は低い前置詞とも共に用いられることを指摘している。またこの交替の動機を明らかにし、英語の与格交替との比較を行うために大規模な調査を実施した。コーパスから 700 例以上の間接目的語構文と 600 例近くの前置詞目的語構文の事例を収集し、英語における与格交替の研究成果も取り入れながら合計 20 の項目について統計的分析を行なった。その結果、二重目的語構文と前置詞構文の交替では語順の他、受容者 (REC; 与格, 前置詞句) の有生性、受容者の情報状態 (givenness)¹⁾、受容者と主題 (THEME; 対格目的語) の語数の差など 10 項目が 2 つの構文の選択に影響すると述べている (De Vaere et. al 2018: 18)。この結果から英語の与格交替と同様の現象が観察されることや、ドイツ語の間接目的語構文と前置詞目的語構文は意味的に等価ではないことを指摘している (De Vaere et al. 2018: 22ff.)。

このように先行研究では主に授与動詞や伝達動詞のもとで観察される交替現象が扱われ、2 つの構文、あるいは与格と前置詞句の相違について記述されてきた。本稿ではこのような動詞に該当しない *anpassen*, *angleichen* を分析対象とする。この 2 つの動詞は与格が比較の基準を表す「比較動詞」の一種である。両者とも比較動詞の中でも「対格の指示対象を与格指示対象に対応させる」という意味を表すグループに属す (時田 2017: 187ff.)。与格と前置詞句の交替においては 2 項とも有生性の制限はなく²⁾、指示対象も類似している (時田 2019: 201ff.)。つまり授与動詞のように与格は所有者の人間、前置詞句は場所の無生物（もしくは人間）を表すという区別は見受けられない。それでは、この 2 つの動詞と共起する与格と前置詞句はそれぞれどのような特徴を示すのだろうか。

3. 事例分析

本節では先行研究を参考にしつつコーパス調査を実施して、*anpassen*,

angleichen の文における与格と前置詞句の実現状況を確認し、相違点や類似点を探ることで、2つの項の形態的・統語的・意味的特徴を明らかにする。分析対象とする事例は、Institut für Deutsche Sprache (IDS) の Deutsches Referenzkorpus から収集し、データベース化したものから抽出した。対象の事例は従属接続詞 dass が導く副文に限定した。

調査は動詞ごとに2段階で行う。調査1では、コーパス事例から無作為に抽出した100例について、比較の基準となる項（与格あるいは前置詞句）の実現割合について調査する。前置詞句については前置詞の種類も提示する。調査2では、コーパス事例から与格の例と an 前置詞句の例についてそれぞれ能動文100文を無作為に抽出し、複数の項目についてその実現状況を調査することで与格と an 前置詞句を比較対照する。なお、angleichen の an 前置詞句については80例しか収集されなかったため、その範囲で調査を行い、分析結果の数値にはパーセンテージを併記する³⁾。なお、与格が現れる文を便宜的に与格構文、an 前置詞句が現れる文を an（前置詞句）構文と呼ぶ。調査2での対象項目は次の通りである：

- [1] 文中での項の語順
- [2] 指示対象の有生性（与格・an 前置詞句、対格の指示対象）
- [3] 無生物の指示対象（与格・an 前置詞句）
- [4] 定性（与格・an 前置詞句、対格）
- [5] 代名詞での実現（与格・an 前置詞句、対格）
- [6] 語数（対格と与格・an 前置詞句の語数の差）
- [7] 副詞的要素の実現（動詞の前）
- [8] 事例の出典（メディア別、国別）

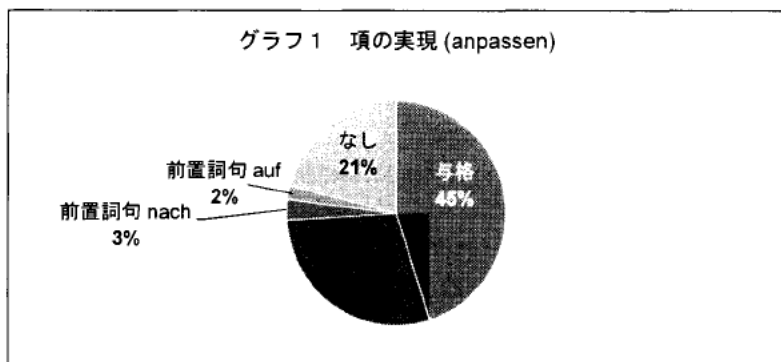
以下では、動詞別に調査1と調査2の結果を提示する。

3.1. anpassen

3.1.1. 調査1：項の実現

無作為に抽出した100例を調査したところ、動詞 anpassen の文では比較の基準を表す項は79例で観察され、そのうち与格が45例、前置詞句が34例と、与格の方がやや優勢であった。前置詞は an が最も多く29例、nach が3例（いずれも nach unten）、auf が2例であった。割合をグラフ1に示す。なお、与格が現れる文の内訳は能動文23例、受動文22例、前置

グラフ 1 項の実現 (anpassen)



詞句の内訳は能動文 16 例, 受動文 18 例であり, ほぼ同様であった。

(5) a. dass Bäume ihr Wachstum tatsächlich den Windgegebenheiten anpassen.
(NZZ11/DEZ.03909 NZZ, 28.12.2011, S. 55)

b. dass die Schweiz ihren Armeebestand nicht kurzfristig an Bedrohungen anpassen könnte. (A12/OKT.03932 St. Galler Tagbl., 10.10.2012, S. 8)

3.1.2. 調査 2: 与格と an 前置詞句

次に, 与格構文, an 前置詞句構文について無作為に収集した dass 文の能動文を対象とし, 調査を行う⁴⁾。

[1] 文中での項の語順

与格構文も an 構文も 100 例全ての事例において比較の基準 (与格, an 前置詞句) が対格より後置されていた。そのうち an の 1 例は前置詞句が動詞より後ろに実現していた (例文 (6))。また主格主語の語順も合わせて見ると, 主格が対格より先行する事例が与格構文, an 構文ともに 62 例, 対格再帰代名詞が主格より先行する事例がともに 38 例であり, 語順に関しては 2 つの構文でほぼ同じ分布であった。

(6) dass sich die im Grundgesetz definierte Religionsfreiheit in ihrer Ausgestaltung anpasst an unsere pluralistische Gesellschaft. (NUZ12/MA1.00110 NZ, 04.05.2012, S. 2)

[2] 指示対象の有生性

次に, 指示対象の有生性を見ると与格は 92 例で無生物を表し, 5 例で生物, 1 例で機関, 2 例で生物と無生物の両方を表している。an 前置詞句

は 92 例で無生物, 7 例で生物, 1 例で機関を表し, 有生性の分布において与格とほとんど同じ傾向を示した。

- (7) a. dass wir uns dem österreichischen Gesetz anpassen. (T05/DEZ.04434 taz, 27.12.2005, S. 13-14)
b. dass System sich in Bremen den Menschen anpasst (T11/NOV.01664 taz, 11.11.2011, S. 24)
- (8) a. dass sich Staat und Wirtschaft besser an ihre Bedürfnisse anpassen. (U99/DEZ.00944 Süddt. Ztg., 14.12.1999, S. 17)
b. Aber dass wir uns derart an den Gegner angepasst haben, (M12/MAI.00264 Mannh. Morgen, 02.05.2012, S. 13)

与格については与格構文で無生物が 53 例, 生物が 32 例, 機関が 15 例で実現し, an 前置詞句構文では無生物が 62 例, 生物が 28 例, 機関が 10 例という結果となった。2 つの構文で大きな相違は観察されなかった。

[3] 無生物の指示対象

与格と an 前置詞句について無生物に分類された指示対象の語彙を観察する。この際, 代名詞は先行詞が表すものを指示対象とし, 例えば *Kostenentwicklung* のような合成語については *Entwicklung* として基礎語で判断する。また, 一文に 2 語以上現れる場合, 別の語として算入する。その結果, 与格では無生物 92 例 (96 語) で 66 タイプ, an 前置詞句では 92 例 (94 語) で 65 タイプが見られた。そのうち 17 タイプが与格と an 前置詞句で重複し, 与格の 41 語 (43%), an 前置詞句の 36 語 (38%) がそれに該当した。それぞれ 2 例以上で現れたものをタイプ別に事例数とともに以下に挙げる。なお, 単数形と複数形が実現する場合, 頻度の高い形を提示する。このうち与格と前置詞句の両方で現れた語は斜体で示す。下線を引いた 7 語は両方で 2 例以上確認された。指示対象においても与格と前置詞句は似通った特徴を持っている。

- (9) a. 与格: *Verhältnisse* (8), *Bedürfnisse* (4), *Gegebenheiten* (4), *Situation* (4), *Bedingungen* (3), *Entwicklung* (3), *Vorstellungen* (3), *Durchschnitt* (2), *Geschmack* (2), *Niveau* (2), *Norm* (2), *Trends* (2), *Realität* (2), *Wünsche* (2)
- b. an 前置詞句: *Realität* (6), *Bedingungen* (5), *Situation* (4), *Zeit* (4), *Gegebenheiten* (3), *Verhältnisse* (3), *Weise* (3), *Werte* (3),

Bedürfnisse (2), Entwicklung (2), Kultur (2), Leben (2), Satz (2),
Umgebung (2)

[4] 定性

名詞句の定性について与格は 88 例で定の要素, 12 例で不定の要素を表しており, an 前置詞句は 86 例で定, 14 例で不定の要素を表し, 割合はほとんど変わらない。また対格は与格構文も an 構文も 98 例で定, 2 例で不定の要素を表す。定性についても 2 つの構文ではほぼ同様の結果を示している。

[5] 代名詞での実現

与格に代名詞が現れる文は指示代名詞の 4 例のみであった。指示代名詞は下記の例文 (10a) のように主格 (= 対格再帰代名詞の指示対象) を先行詞とする場合と, 例文 (10b) のように後置された関係文を先行詞とする場合がある。与格に名詞が現れる文 96 例では, 主に定冠詞が共起していた。内訳を事例数と共に (11) に挙げる。

(10) a. dass sich die Wertvorstellungen mit der Zeit **jenen der Schweizer** anpassen. (SBL11/JUL.00159 Sonntagsblick, 10.07.2011, S. 16)

b. dass sich die Rechtsradikalen und die Rechten äußerst sinnvoll **dem** anpassen, was wir versuchen, an Strukturen zu verhindern. (Protokoll der Sitzung des Parlaments Landtag Schleswig-Holstein am 13.12.2012)

(11) 代名詞: 指示代名詞 (4)

名詞: 定冠詞 (75), 所有冠詞 (6), 無冠詞複数 (6), 不定冠詞 (4),
指示冠詞 (3), 無冠詞・単数 (1), 無冠詞・複数 + 定冠詞 (1)

an 前置詞句に代名詞が現れる文は 10 例見られ, 指示代名詞 4 例, daran が 4 例, 人称代名詞が 2 例であった。指示代名詞は例文 (12a), (12b) のように対格あるいは後置された関係文を先行詞としている。an 前置詞句に名詞が現れる文 90 例では定冠詞を伴う事例が最も多かった。内訳を以下の (13) に挙げる。代名詞の割合も名詞の冠詞の種類も与格と an 前置詞句は類似の傾向を示した。なお無冠詞 13 例のうち 3 例は例文 (12c) のように形容詞の格語尾がなく, 格表示がなされていなかった。このように無冠詞で, かつ形容詞による格表示がない事例は与格構文には見られなかった。

(12) a. dass „Ausländer ihren Lebensstil besser an **den der Inländer** anpassen

sollten; ...“ (PRF14/JUL.00247 profil, 28.07.2014, S. 14,15,16,17)

b. dass ... die über die Brille eingespielten Hinweise sich immer sofort an **das** anpassen, was er gerade im Blickfeld hat (SBL05/APR.00240 Sonntagsblick, 10.04.2005, S. M46)

c. dass die Schweiz ihren Armeebestand nicht kurzfristig an Bedrohungen anpassen könnte. (A12/OKT.03932 St. Galler Tagbl., 10.10.2012, S. 8)

(13) 代名詞：指示代名詞 (4), daran (4), 人称代名詞 (2)

名詞：定冠詞 (69), 無冠詞・複数 (12), 所有冠詞 (4) 不定冠詞 (2), 指示冠詞 (2), 無冠詞・固有名詞 (1)

次に対格の代名詞を調査する。与格構文では 69 例, an 構文では 63 例で代名詞が実現していた。与格構文では再帰代名詞が 67 例, 人称代名詞が 2 例であった。an 構文では再帰代名詞が 60 例, 人称代名詞が 2 例, 指示代名詞が 1 例確認された。与格構文の対格名詞 31 例には所有冠詞 (15 例), 定冠詞 (12 例) などが共起し, an 構文の対格名詞 37 例にも所有冠詞 (19 例), 定冠詞 (14 例) などが共起している。対格の代名詞化においても与格構文と an 構文ではごく近い傾向を示している。

[6] 語数

与格・前置詞句の語数から対格の語数をマイナスした数を比較すると, 与格構文では平均 1.93 語, an 前置詞句構文では 1.81 語であり, 大きな違いは観察されなかった。

[7] 副詞的要素の実現

与格もしくは an 前置詞句の後ろ, すなわち動詞の前に副詞的要素が実現する事例を調査したところ, 与格構文では 7 例, an 構文では 1 例が該当した。

(14) a. dass man sich geschmeidig wechselnden Situationen rasch anpassen muss. (U04/JUN.04510 SZ, 26.06.2004, S. ROM6)

b. dass sich ein Wirtschaftssystem daran dynamisch anpassen müsse. (WDD11/S53.71654 Wikipedia; Diskussion: Soziale Marktwirtschaft/Archiv/2009/1. Teilarchiv, (Letzte Änderung 9.5.2010), 29.10.2011)

[8] 事例の出典

例文の出典を調査すると新聞雑誌などのニュース, 議会の議事録, Wikipedia, 専門誌に分けられる。その分布は以下のように与格構文でも

an 構文でもニュースが中心であり、他のメディアの割合も2つの構文で類似している。また、Wikipediaを除いて出典の国別に分類すると、与格構文も an 構文もドイツの頻度が高いのは同様であるが、スイスの事例では与格構文、オーストリアの事例では an 構文が10例以上多い点が特徴的である。

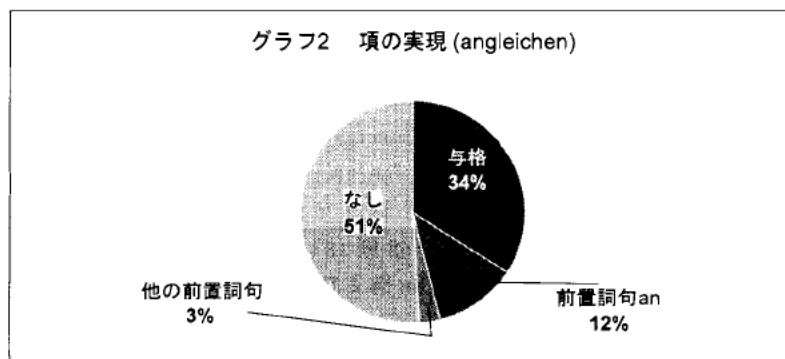
- (15) 与格構文：ニュース (78), 議事録 (13), Wikipedia (9)
 an 構文：ニュース (75), 議事録 (11), Wikipedia (11), 専門誌 (3)
- (16) 与格構文：ドイツ (52), オーストリア (6), スイス (33),
 Wikipedia (9)
 an 構文：ドイツ (57), オーストリア (16), スイス (16), Wikipedia (11)

3.2. angleichen

3.2.1. 調査1：項の実現

動詞 angleichen について無作為に抽出された100例を調査したところ、49例で比較の基準の項が実現し、内訳は与格が34例、前置詞句が15例であった。割合をグラフ2に示す。与格は能動文25例(74%)、受動文9例(26%)で実現し、前置詞句は能動文8例、受動文7例で実現していた。事例数は少ないが、若干の相違が見られた。なお、前置詞句は an が12例、gegenüber, unter, zu が各1例で見られた。

- (17) a. dass man seine Überzeugung der Erklärung angleicht, (A97/JUN.07615



St. Galler Tagblatt, 05.06.1997)

b. dass sich Ostdeutschland allmählich an Westdeutschland angleichen würde. (NZZ03/OKT.03890 NZZ, 24.10.2003)

3.2.2. 調査 2：与格と an 前置詞句

次に、与格構文、an 前置詞句構文について無作為に収集した dass 文の能動文を対象とし、調査を行う。なお、an 前置詞句は収集された 80 例を対象とする。

[1] 文中での項の語順

与格構文 100 例、an 構文 80 例 (100%) とともに全ての事例において比較の基準 (与格、an 前置詞句) が対格より後置されていた。また主格主語の語順も合わせて見ると、与格構文では主格が対格より先行する事例が 49 例、対格が先行する事例が 51 例でほぼ同数であった。an 構文では主格が先行する事例は 45 例 (56%)、対格が先行する事例は 35 例 (44%) であり、与格構文と類似した傾向を示した。

[2] 指示対象の有生性

まず与格の指示対象については無生物が 88 例、生物が 7 例、機関が 5 例であった。an 前置詞句では無生物 69 例 (86%)、生物 5 例 (6%)、機関 6 例 (8%) でほぼ同様の割合を示した。

(18) a. dass sie ihre Kontrollen nur dem Niveau in anderen Ländern angleichen wollen, (U11/JUN.01139 SZ, 09.06.2011, S. 5)

b. dass sich die Frauen den Männern angleichen, (NUN11/JUL.01001 NN, 09.07.2011, S. 13)

(19) a. dass ich die Sprache sanft ans Hochdeutsche angleiche, (HMP07/MAI.00166 MOPO, 03.05.2007, S. 27)

b. dass Menschen ihre Sprechweise sehr schnell an ihr Gegenüber angleichen, (Z14/DEZ.00366 Zeit, 18.12.2014)

対格指示対象は、与格構文で無生物が 76 例、生物が 13 例、機関が 11 例で実現し、an 構文では無生物が 68 例 (85%)、生物が 5 例 (5%)、機関が 7 例 (9%) で現れ、与格構文と an 構文では同様の傾向が確認された。

[3] 無生物の指示対象

与格と an 前置詞句について無生物の指示対象を調査したところ、与格

では 88 例 (91 語) で 61 タイプ, an 前置詞句では 69 例 (70 語) で 50 タイプ見られた。与格と an 前置詞句で重複したのは 12 タイプで, 与格の計 35 語 (38%), an 前置詞句の 30 語 (43%) がこれに該当した。2 例以上で現れた語を事例数とともに以下に挙げる。このうち与格と前置詞句の両方で現れた語は斜体で示す。下線を引いた 3 語は両方で 2 例以上確認された。指示対象においても与格と前置詞句はある程度類似していると言える。

- (20) a. 与格: Niveau (10), *Verhältnisse* (8), Standard (5), Preis (4), Sprache (4), Anteil (2), Dynamik (2), Leben (2), Stand (2)
b. an前置詞句: Niveau (9; 11%), Standard (8; 10%), Preis (3; 4%), *Durchschnitt* (2; 3%), *Entwicklung* (2; 3%), *Inhalt* (2; 3%)

[4] 定性

与格は 95 例で定の要素, 5 例で不定の要素を表しており, an 前置詞句は 70 例 (88%) で定, 10 例 (13%) で不定の要素を表している。また対格は与格構文の 100 例すべてで, an 構文では 79 例 (99%) で定の内容であった。項の定性においても 2 つの構文に見られる傾向は類似している。

[5] 代名詞での実現

与格に代名詞が現れる文は指示代名詞 23 例, 人称代名詞 1 例, 所有代名詞 1 例の計 25 例だった。指示代名詞と所有代名詞は例文 (21) のようにすべて対格 (対格が再帰代名詞の場合主格の対象) の名詞を先行詞としていた。名詞が現れる 75 例のうち多くで定冠詞が共起している。内訳を以下の (22) に挙げる。

- (21) dass sie ihre Standards bei der Asylpolitik **denen der Europäischen Union** angleicht. (U12/JUN.03183 SZ, 22.06.2012, S. 7)
(22) 代名詞 25 例: 指示代名詞 (23), 所有代名詞 (1), 人称代名詞 (1)
名詞 75 例: 定冠詞 (63), 無冠詞・複数 (5), 所有冠詞 (4), 無冠詞・固有名詞 (2), 指示冠詞 (1)

an 前置詞句では 17 例 (21%) で代名詞が実現し, すべて指示代名詞であった。これらは対格 (対格が再帰代名詞の場合主格の対象) の名詞を指している。名詞 63 例 (79%) のうち多くは定冠詞を伴う。内訳を以下に挙げる。無冠詞 10 例のうち 7 例は形容詞も伴わず格表示もなかった。このような事例は与格では 2 例のみであった。

- (23) dass sie ihre Arbeitsbedingungen an **diejenigen der Post** angleichen,

(NZZ04/JUN.00882 NZZ, 05.06.2004, S. 14)

(24) 代名詞 17 例 (21%) : 指示代名詞 (17; 21%)

名詞 63 例 (79%) : 定冠詞 (47; 59%), 無冠詞・複数 (5; 6%), 無冠詞・固有名詞 (4; 5%), 不定冠詞 (4; 5%), 所有冠詞 (2; 3%), 無冠詞・単数 (1; 1%)

次に対格を見ると、与格構文では 79 例、an 構文では 50 例 (63%) で代名詞が実現し、構文の間で頻度の差が確認された。与格構文においては再帰代名詞が 76 例、人称代名詞が 3 例で現れ、an 構文においては再帰代名詞が 49 例、人称代名詞が 1 例であった。名詞は冠詞を伴うものが多い。与格構文 (21 例) では定冠詞が 10 例、所有冠詞が 10 例など、an 構文では定冠詞 18 例 (23%)、所有冠詞 9 例 (11%) などと共起し、2 つの構文では定冠詞の割合でも若干違いが見られた。

[6] 語数

与格・前置詞句の語数から対格の語数をマイナスした数を調査すると、与格構文では平均 1.91 語であり、an 前置詞句構文では 1.68 語であった。ほぼ同様の語数であった。

[7] 副詞的要素の実現

与格もしくは an 前置詞句の後ろの位置、動詞の前に副詞的要素が実現する事例を調査したところ、与格構文では 9 例、an 構文では 1 例 (1%) が該当した。

(25) a. dass sich ein Orchester dem Spielcharakter seines Gast-Stars so genau angleicht, (M09/FEB.08542 Mannh. Morgen, 02.02.2009, S. 32)

b. dass sich im Zuge einer Entwicklung die Löhne in den neuen Bundesländern an die in den alten Bundesländern weitgehend angleichen werden. (Protokoll der Sitzung des Parlaments Deutscher Bundestag am 17.10.2012)

[8] 事例の出典

例文の出典については、メディア別に見ると与格構文でも an 構文でもニュースが最も頻度が高く、他のメディアも 2 つの構文でほぼ同様の割合である。また、Wikipedia を除いて出典の国別に分類すると、与格構文も an 構文もドイツの頻度が最も高いが、ドイツの事例では an 前置詞構文が、スイスの事例では与格構文が比較的高い割合である。

- (26) 与格：ニュース (81), 議事録 (6), Wikipedia (13)
 an：ニュース (59; 74%), 議事録 (10; 13%), Wikipedia (8; 10%),
 専門誌 (3; 4%)
- (27) 与格：ドイツ (43), オーストリア (7), スイス (37), Wikipedia (13)
 an：ドイツ (46; 58%), オーストリア (7; 9%), スイス (19; 24%),
 Wikipedia (8; 10%)

4. 結果と考察

第3節で行った事例分析の結果、調査1では、anpassenとangleichenの2つの動詞の文で与格と前置詞句の実現率には差があるが、いずれも与格の方が高い頻度で現れることが示された。前置詞句は前置詞anを伴うものが大多数を占めている。また与格、前置詞句のどちらも現れない事例も一定数確認された。調査2では、anpassenやangleichenと共起する与格とan前置詞句そのもの——有生性、指示対象、定性など——には決定的な相違は抽出されず、基本的にかなり類似した傾向を示すことが明らかになった。この結果はgebenなど授与を表す動詞とは全く異なる特徴を示している。

各構文における差異はいくつかの項目で確認された。カイ2乗検定を行ったところ、anpassenの文では2項目が構文の違いと有意な関連があるという結果になった⁵⁾。調査2の[7]動詞の前の副詞的要素の実現 ($p=.03$)と[8]事例の出典のうち出版国 ($p=.01$)である。またangleichenの文では、調査2の[5]代名詞での実現のうち対格の割合 ($p=.0005$)について有意な関連があることが分かった。以下ではこの3点に関して考察する。

[5] 対格の代名詞化については2つの動詞どちらの文でも対格が再帰代名詞で実現する傾向が強い。そのうちangleichenの文では与格構文の方がan構文より多くの割合で代名詞が実現していた。一文の中で代名詞ではなく語彙的に(名詞として)実現するのは、典型的には1項のみであると指摘する研究がある(Du Bois 2003: 33ff.)⁶⁾。これは語用論的視点による制限である。例えば3項動詞の場合、主語と間接目的語は代名詞として、直接目的語は名詞として実現するのが典型的だという。本稿のangleichenの文でan前置詞句構文(2項+前置詞句)より与格構文(3項)において対格の代名詞が現れる傾向が強いというのは、この主張と一致する。

[7] 動詞の前の副詞的要素については、anpassen の場合、与格構文の方が実現の頻度がいくらか高い。angliedern の場合も同様の差が見られた⁷⁾。Zifonun et al (1997:1548ff.) によれば、an 前置詞句のような前置詞補足語 (Präpositivkomplement) は文の中域において無標の語順では右端に置かれるカテゴリーに含まれる。基本的な構造ではこのカテゴリーの前に性質を表す添加語や否定語の添加語が置かれ、(無生物を表す) 与格目的語は、さらにその前が基本位置とされている。調査結果は、実際に an 前置詞句より与格の後ろに副詞的要素が現れる頻度の方が高かった。与格と an 前置詞句の類似点が多いとはいえ、完全に同じ環境で実現するとは限らず、形式的な相違が影響を与える部分がある可能性を示している。

[8] 出典の国については anpassen の文だけでなく angleichen の文でも与格構文ではスイスの割合が an 構文より 13 ポイント高い。スイスでは an 構文より与格構文が好まれる傾向があると考えられる。

以上のように、anpassen と angleichen の与格と前置詞句には若干の相違が確認されたが、両者の差を決定的に特徴づけるものではないといえる。それにも関わらず与格と前置詞句の2つの形式が存在する理由はどこにあるのだろうか。今回の調査では明らかにできなかったが、この問いを解決する手がかりの一つとして、出典の年代に関するパイロット調査を行った。Berlin-Brandenburgischen Akademie der Wissenschaften の Deutsches Textarchiv⁸⁾ のコーパスを対象に anpassen, angleichen の事例を収集した。そのうち 19 世紀の事例を対象にし、出版年順に 100 例調査したところ⁹⁾、anpassen の事例では与格と共起する他動詞文は 73 例であったが、an 前置詞句と共起する事例は 1 例も見られなかった¹⁰⁾。また angleichen では与格の該当事例が 7 例のみだが、an 前置詞句の事例は収集されなかった¹¹⁾。本稿第 3 節の調査 1 の結果と比較すると、an 前置詞句の実現割合は増加しており、何らかの影響により用法の変遷があったと考えられる。

以上、本稿では動詞 anpassen, angleichen と共起する与格と前置詞句をコーパス事例に基づき分析した結果、授与動詞と共起する一般的な与格と前置詞句の交替とは異なり、この2つの項には多くの形態的・統語的・意味的項目で共通した特徴があることを指摘した。この両者が使い分けられる動機は未だ明らかではないため、地域的特徴、歴史的な用法の変遷等も視野に入れながら、今後の研究の課題としたい。

注

- 1) givenness には given (既出), accessible (想定可能), new (未出) が設定されている。
- 2) この点については, Matzel (1976: 161ff.) にも指摘がある。授与・伝達動詞以外に交替が見られるものとして, an を伴う不変化詞動詞が挙げられているが (angleichen/anpassen, angliedern, anhängen, anheften/anklammern, annähern, anschließen), これらは無生物 [-anim] の名詞を与格や前置詞句に要求すると述べている。
- 3) 小数点以下は四捨五入する。
- 4) 前置詞句の事例として aneinander の事例は除いた。
- 5) 有意水準を 5% とした場合。以下同様とする。
- 6) “Preferred Argument Structure constraints” と呼ばれている (Du Bois 2003:34)。
- 7) angleichen の事例ではカイ 2 乗検定において期待値が 5 を下回り, 結果が不正確になるため対象から除外した (石川他 2010: 64)。なお anpassen の事例でも実測値は 5 を下回っている。
- 8) <http://www.deutschestextarchiv.de/> で利用できる。
- 9) 主文, 副文, zu 不定詞句を含める。
- 10) 1801 年から 1832 年の事例が対象となった。
- 11) 1802 年から 1892 年の事例が対象となった。

文献

- Adler, Julia: Dative alternation in German. The argument realization options of transfer verbs. Hebrew University doctoral dissertation. 2011.
- De Vaere, Hilde / Ludovic De Cuypere / Klaas Willems: Alternating constructions with ditransitive *geben* in present-day German. In: Corpus Linguistics and Linguistic Theory 2018. (online) 1-35.
<https://doi.org/10.1515/cllt-2017-0072>
- Du Bois, John W: Argument structure - Grammar in use. In: John W. Du Bois / Lorraine E. Kumpf / William J. Ashby (ed.) : Preferred Argument Structure. Grammar as architecture for function. Amsterdam / Philadelphia. John Benjamins Publishing Company. 2003. 11-60.

- Matzel, Klaus: Dativ und Präpositionalphrase. In: Sprachwissenschaft Band 1. 1976. 144–186.
- McIntyre, Andrew: The interpretation of German datives an English *have*. In: Daniel Hole / André Meinunger / Werner Abraham (ed.) : Datives and Other Cases. Between argument structure and event structure. John Benjamins Publishing Company. 2006. 185-212.
- Meinunger, André: Remarks on the projection of dative arguments in German. In: Daniel Hole / André Meinunger / Werner Abraham (ed.) : Datives and Other Cases. Between argument structure and event structure. John Benjamins Publishing Company. 2006. 79-101.
- Wegener, Heide: Der Dativ im heutigen Deutsch. Tübingen: Narr. 1985.
- Wunderlich, Dieter: Towards a structural typology of verb classes.
http://www.leibniz-zas.de/fileadmin/Archiv2019/mitarbeiter/wunderlich/StructTypology_of_VerbClasses.pdf. 1-65.
(In: Dieter Wunderlich (ed.) : Advances in the Theory of the Lexicon. Mouton de Gruyter. 2006. 57-166.)
- Zifonun, Gisela, Ludger Hoffmann & Bruno Strecker: Grammatik der deutschen Sprache. Berlin/New York: Mouton de Gruyter. 1997.
- 石川慎一郎 / 前田忠彦 / 山崎誠 : 言語研究のための統計入門. くろしお出版. 2010.
- 時田伊津子 : 比較を表す二重目的語構文. In: リュンコイス第 50 号. 桜門ドイツ文学会, 2017. 185-200.
- 時田伊津子 : 後置与格と前置詞句の交替可能性. In: リュンコイス第 52 号. 桜門ドイツ文学会. 2019. 199-209.